

老舎『国家至上』試論

渡辺武秀*

On Lao She's "Guo Jia Zhi Shang"

Takehide WATANABE*

概論

《国家至上》は一九三九年老舎在重慶写の第二部话剧作品、和第一部话剧作品《残霧》有着不一样的创作条件。这部作品不是“老舎灵感的果实”，而是受回教救国协会的委托写的。而且不是老舎单独创作，而是与宋之的合作完成的。这部《国家至上》虽然是在这样的条件下完成的，但是作品非常成功，很受回族人的欢迎，老舎自己也表示对这部作品很满意。

这部话剧作品的主题在作家开始创作之前就由于回教救国协会确定为“回汉团结，共同抗日”。因此，在这部话剧作品里描写出的是，回族的人们解除民族之间的“对立”，建立民族“团结”的故事。但是我以为，这部话剧作品超越了我们一般所了解的宣传文学概念。作家描写方法特别独特，登场人物也非常生动。这部话剧作品超越了民族“对立”的范围，挖掘出各种“对立”本身的深刻局面来，展现在大家的眼前。

Keywords: Lao She, war, Islam

はじめに

老舎の『国家至上』は1939年に重慶で発表されたものである。老舎が書いた最初の話劇は『残霧』であり、第二作目がこの『国家至上』となる。この作品は、のちに1940年の『抗戦文芸』第6巻1期(3月)、第6巻2期(5月)に掲載された。つまり老舎は『残霧』で話劇の分野にデビューし、この『国家至上』で彼の話劇創作が軌道に乗り、そしてこれ以後次々に話劇作品を発表して行くことになる。^(註1) この流れからしてもこの『国家至上』は老舎の話劇創作の上で極めて重要な位置を占めているといえることができるだろう。

以前第一作目の『残霧』についてはすでに述べたことがある。^(註2) これに引き続き、今回、この小論でこの『国家至上』を取り上げ論じることにする。

この話劇は創作動機、創作方法などが第一作

目の『残霧』といささか異なっている。例えば、この作品が、ある団体から、あるテーマで依頼され、それに沿って創作したものであるということもその一つである。したがって、この小論では、まず、こういったものを整理し、そこからこの作品を論じる方向を定めて分析を始めたいと思う。

—

この作品には「序」と「後記」があり、老舎は、「後記」の方にこの作品の成立事情を書いている。^(註3) まずこれを見てみよう。この文章は短いこともあり、以下に「後記」の全文を挙げる。

『国家至上』この劇はインスピレーションの果实ではなくて、私たちが回教救国協會の委託を受けて、じっくり一切を構想し始めたものである。回族と漢族の団結を促進するため、国民の、回族の生活及び回教文化への注意を引き起こすため、回教協會が之的と私に、話

平成19年1月5日受理

* 感性デザイン学科・教授

劇を作って、宣伝をするように要請した。私たちは承知した。私たちは幼い頃より北方で見た回族同胞の生活習慣を利用し、抗戦中の事実や想像を混ぜ合わせ、長い間相談し、そうして私が筆を取って物語を作った。物語ができあがり、之的に引き渡し彼が場面を分けた。場面が分け終わり、私が一、二幕を書き、彼が三、四の二幕を書いた。四幕を書き終わり、回教協会に持っていき一度朗読した。協会の中の友人が意味と言葉が妥当でない処を一つ一つ指摘し、我々は最初から一度修正して、脚本を納めた。／脚本を納めて暫くして、回教協会は中国万歳劇団に頼んで演出してもらった。劇団はこの劇を初公演とし、重慶の国泰戲院で上演した。上演以後の話は、批評家に話してもらうことにし、私はここで口を閉じることにする。^(註4)

この「後記」からこの劇に特有の創作事情を次のようにまとめることができるだろう。

- (1) この話劇は自分が書きたいと思って筆を取ったのではなく回教救国協会に依頼されたものである。
- (2) テーマは回族と漢族の団結を提唱し、共同して日本軍と戦うというものとする。つまり、この劇は「回漢団結、共同抗日」の目標を達成するためのものである。
- (3) また、老舎が一人で書いたのではなく、宋之的と作品の全体について相談した上で、二人で分担して書いたものである。^(註5) 老舎がまず全体のストーリーを作り、それをもとに之的が幕を分け、第1幕、第2幕を老舎、第3幕、第4幕を宋之的というふうに分担した。
- (4) 劇を書き終え、回族の依頼者にも読んで聞かせ、彼らの意見に基づき修正し、依頼者に納めた。

この話劇の評判はどうだったのか。これについてはこの作品の「序」の方でその一端を自ら紹介している。以下に「序」の全文を挙げる。

この劇は重慶で何回も上演され、とても成功した。内容は回族、漢族が手を携え抗日を行うというものだったので、回教の人、均衆観が演出した。香港、西安、蘭州、成都、昆明、恩施等の地域で上演したときどこでも回族同胞の熱烈な賛助を得た。現在上海で重印することになった。もしかして抗戦が勝利し戦いが終わっても、回族、漢族間の協力の精神がしだいに薄らぐことがあるときのみ、なおわずかに上演の機会があるだけだろう。^(註6)

この作品は回族の人々にも好意を持って受け入れられ、なかなか評判がよかったことが窺える。

ただ、この作品は回族救国協会に依頼され、テーマも予め「回漢団結、共同抗日」と決まっております、その宣伝のために書かれたものであるとすれば、これを「文学」とすることができるか。また、分担執筆ということからすれば、この作品が「老舎」だけの作品だとは言えないのではないか。この劇の創作事情が事情だけに、このような疑問を払拭することができない。

老舎はこの作品創作にどれほどの割合で関わったのか。これについてはすでに知る術はない。ただ、創作の現場を考えると、二人で書いたとはいえ、最終的にはどちらかが主導権を握ることになることは必然である。この点や前掲の老舎の文章から、この話劇『国家至上』は、全体の構想は老舎が考えたのであり、それに基づいて宋之的と分担して書き、出来上がって回族の人々の意見を聞き、最後にはきちん老舎が自らの手で修正を加え出来上がったものである、と言うことはできるだろう。

この点について結論を出すことはできない。したがって、この劇の、このような事情を充分承知した上で、今回は、この考察を進めることとし、そこに発生するであろう問題は今後の課題としておきたい。

二

この『国家至上』のテーマが「回漢団結，共同抗日」であることは最初から決まっていたとすれば，ここで考察すべきは，作者が，如何にして，この劇で観客を「回漢団結，共同抗日」の方向に引っ張って行っていくのか，ということであろう。これこそがこの劇での作者の腕の見せどころである。つまり，この小論では，まさにこの部分を明らかにすることこそが今回の考察の目標となるべきなのである。

まずこの話劇の第一幕のト書きから見て行く。

「場所は河北省のある村，村人は回族，漢族それぞれ半分ずつである。この村は場所性と財政上からして，役所のある町よりも重要である。」この村に日本軍がまさに押し寄せようとしている。絶対にこの村を日本軍の攻撃から守り抜かねばならない。だが，この戦いに勝利するためには幾つかの条件がある。それは，この村に半々位で住んでいる回族や漢族の人々が「回漢団結，共同抗日」の気持ちを持ち，そして実際にそれに基づく行動を取れるかどうかである。もう敵は目前に迫っている。残された時間はない。だが，村では「回漢団結，共同抗日」がまだできあがっていないのである

この村の回族の二人の重要人物—— 或いはこの劇の主人公と言っていいだろう —— は「張老師」と「黄子清」である。この作品では，彼ら二人の体型も，行動も，気質も悉く対照的に設定している。第一幕のト書きの人物紹介を見てみよう。

まず，張老師である。

六十歳の回教の老武術家。清廉，機敏，強健，頑固，狭量。絶対の自信家。人並み外れて勇敢。回教の教えを非常に厳格に守っている。壮年の頃，独力で大物盗賊をやっつけ，名を河北，山東に馳せ，知っている人も知らない人もみんな彼を「師」と称した。人に対し

ては熱い誠を具えているが，礼儀を欠く。極めて独善的で，人に服従を強いる。自分の命よりずっと名誉を尊ぶ。年は取ったが依然として平気で危険を冒す—— 個人主義の英雄である。衣冠をきちんと整え，頭を剃り，髭はいささか白く，齒はまだ抜けておらず，目には鋭い眼光があり，外見が立派で真面目な態度を具えている。滄洲の馬振雄，本県の黄子清とは，兄弟の契り結んでおり，回教三傑と言われていた。^(註7)

一方，黄子清である。

五十八歳。度量が大きく朗らか，心がのびのびとし身体もゆったりしている—— とても肥っていて，自らその充分さを見るのは難しい。心根が温かく，人が困っているのを助ける。またユーモア感も豊富で，人と言い争ってもちょっと笑って終わらせる。清真小学校を経営して，回教内外の勉強してない子どもたちを入れている。少し誇張を喜び，とりわけ人からお世辞を言われるのを好む。だから善行をしようという善い心はあるのだが，時には非難を招くこともある。衣冠は整っていません，禿頭で髭はない。道を歩くのがたいへんで，声は伸び伸びとして透き通っている。^(註8)

またこの劇ではト書きで最初に張老師と黄子清の関係が紹介されている。これが以下の文章である。

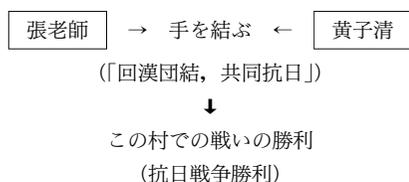
黄と張は親友であった。数年前，黄が教徒内外の子どもを教育した。張はこれに異議を申し立て，言い争いによって絶交した。黄はしばしば仲直りをしようとした。張は心の中では嬉しがっていたが，行動の上でこれを表わせなかった。かつ問題が起きても絶対に黄と協力することはしない。こんなところに意地っ張りな個性が表れている。^(註9)

二人の立場の違いを物語に則し図式的に言えば次のようになるだろう。

張老師は漢族とは別に回族単独でこの村を攻撃してくる日本軍と戦うことを主張しており、一方、黄子清の方は、回族と漢族とが協力しながら日本軍と戦っていかうとする漢族の長官の考え方を支持し、このことのために協力を惜しまない。

この二人の人物の握手が「回漢団結、共同抗日」の成立のシンボルで、二人が袂を分かつことが「回漢団結、共同抗日」の破産を意味し、またさらにこの二人の人物の握手は日本軍との戦いの勝利へ、逆に二人の決別は敗北へと繋がっていることが暗示されている。

これを図示すれば以下のようなになる。



また、彼らの周りにいる人物たちもほぼ二つのグループに分かれる。一つのグループは、黄子清を支持し、二人が手を結ぶように行動する人々である。ここには「回漢団結、共同抗日」を推進しようとする漢族の指導者、その協力者も含まれる。もう一つのグループは張老師を個人的に慕う者、或いは二人を引き離すような言動、行動をする人物が含まれている。張老師の側にいるのは、回族の人々のみである。

このような劇世界であるから、観客は、「張老師」と「黄子清」が手を結びそうになれば手を叩いて大喜びをし、「張老師」と「黄子清」が反発しそうになれば観客はガッカリすることになる。だから、作者は、観客を時には喜ばせ、時には悲しませ、時には焦らし、最後に「回漢団結、共同抗日」の達成というハッピーエンドに持って行く。

三

ここで、張老師の態度を「回族単独主義」（以下これを「単独主義」と略述する）という言葉で、黄子清の態度を「漢族との協調主義」（以下これを「協調主義」と略述する）で表わしておこう。

この作品の主張が「回漢団結、共同抗日」である以上、最初から「単独主義」の方を否定する立場に立つことは必然といえる。また「単独主義」と「協調主義」を比べれば、明らかに、例えば、前者は基本的には漢族と一緒に生活、行動をしないという点からも、漢民族との「団結」より「対立」を生み出しやすいことは容易に理解できる。

だが、実際の生活の中で、回族の人が「単独主義」を否定し、「協調主義」を肯定するとは限らず、寧ろ、実際には「対立」を発生させる「単独主義」が回族の人に支持され、「協調主義」が疎んじられることがある。この劇でも、この点に触れている。

次の場面は、「協調主義」を取る黄子清の態度と、それを馮鉄柱が如何に受け取っているかを描き出している箇所である。

馮鉄柱 彼ら二人、彼ら二人が僕を虐めた。
 黄子清 もう良い、もう良い。鉄柱、そんなに半狂乱みたいにするんじゃない。
 馮鉄柱 県長さんがもしかまってくれないなら、僕は張老師の処に行って白黒をつけてもらう。黄伯父さん、あなたはいつも回族以外の人にえこひいきをする。^(註10)

確かに馮鉄柱は特に悪い行為をしたわけではない。だから、むしろ馮鉄柱を虐めた方が間違っている。しかし、黄子清は「協調主義」であるが故になおさら頭から漢族の子どもだけが一方的に悪いという立場を取らない。この態度が回族の馮鉄柱の不満を引き起こしている。馮鉄柱は却って黄子清が漢族に「えこひいきをいてい

る」と感じているのである。

また一方、馮鉄柱の訴えに「単独主義」の張老師はどのように反応しているのか。

馮鉄柱（張を湯飲み茶碗の処へ引っ張ってゆき）張老師、今日ここで虐められたんで、僕は敵討ちをしなくちゃいけない。

張老師（とても優しく）誰がお前さんを虐めたのかい？

馮鉄柱（目に涙を浮かべて）大勇と二妞、彼ら二人だい！

張老師 おお、胡家のあのこわっばか！それでお前はどうしたんだ？

馮鉄柱 彼らは二人で僕は一人だったから、彼らに対抗できなかった。

張老師 お前は逃げたのか？泣いたのか？

馮鉄柱 僕は逃げなかったし、泣きもしなかった。僕は徹底的にやりあった。

張老師 良い子だ。根性がある。良い子だぞ！わたしたちは男の中の男だから永遠に逃げる事ができないし、泣くこともできない。

馮鉄柱（だんだん得意になって）僕は逃げず、泣きもせず、茶飲み茶碗を取り上げて、すぐに彼ら二人にぶっつけてやろうとした。

張老師 良い子だ。ワシはお前を弟子にした！お前は根性がある！（¹¹）

このやりとりから、回族の人々の中では、実は、張老師が黄子清に比べれば圧倒的に人気がある理由が推測できる。

張老師の「単独主義」は必ず回族を信じる。だから回族の人は何があっても張老師は自分たちの味方をすると感じる。甚だしきに至っては張老師は喧嘩の理由を一切問わず全面的に自分の方を支持してくれそうである。だから、回族の人が、黄子清のような、漢族にえこひいきをする「協調主義」の人物より、張老師のような、必ず回族の味方をする「単独主義」の人物を喜ぶ

のは当然である。

この作品にはこのようなところが最初に描き出されている。この点に注目すれば、作者がどのような姿勢で、どのようにこの劇を作り上げようとしているのかがいくらか理解できる。つまり、作者は回族の人々の中に「単独主義」を喜ぶ傾向があることを十分承知した上で「漢回団結、共同抗日」の目標を達成するために、この「単独主義」を喜ぶ人々のその感情と対決し、きちんとその人々を納得させて「単独主義」を放棄させようとしているのである。

では、作者がこの劇でどのようにこの目標を達成しようとしているのか。その方法は、「単独主義」を取ることで発生する幾つかの弊害というか、問題というか、そのような「危険な落とし穴」をこの劇で暴き出し、それを観衆の前で誇張することで、観客に「単独主義」に嫌悪感を抱かせ、最終的には「単独主義」を放棄してもらおうとする、というものである。

このところを「節」を改め考えてみよう。

四

ただ一口に「危険な落とし穴」といっても、様々あるだろうし、現実の場面ではなかなか簡単に見抜けるものではない。では如何にしてこの「危険な落とし穴」をはっきりと示すことができるか。

作者のこの工夫は人物描写にある。

この劇の登場人物をじっくり観察すると、この劇には「悪人」は一人しかいないことに気づく。その他の登場人物は皆「善人」なのである。¹²これがこの作品の一つの特徴であると言える。確かに二つのグループは表面上では対立はしているが、それらの人々の心は「善良」なのである。この人物設定であるので、まるで白地の中に一点の黒い点が浮かび上がってくるように、人間模様の中にしだいに「危険な落とし穴」がくっきり浮かび上がって見えてくる。

中心人物の張老師と黄子清とは、対立してい

るが、どちらも人間的には「善人」といわれる人々である。どちらも人から好かれ、信心深く、国を思う気持ちはどちらも強い。

まず、黄子清の方を見てみよう。少し長いが、その黄子清の独白の部分を見てみる。

趙県長 思想も正確です。私たちみんなを団結させようとしておられる。貴殿と張老師が協力され、それから更に回族と漢族が協力し合う、教徒内がお互いに仲良くし、教徒外ともお互いに仲良くする。そうして、みんなと一緒に日本人と戦うのです。

黄子清 分かりました。まず私の方から言いましょう。喜んで！（お茶を飲み終わり、急いでまた注ぎ、立ち上がり）信じてください。みなさんが私に張老師に膝をついて頭を下げに行かせようとされるのであれば、私は間違いなく行きます。彼は私のお互いに誓い合った兄です。以前どちらが正しかったかとか、どちらが正しくなかったなんて関係ありません。弟が兄に許しを請うことは、絶対に恥ずべきことではないのです。ご存じでしょうが、（ちょっと思いに耽る）あの年、私が回教内外の子どもたちを受け入れ、私の学校で勉強させました。このことで彼と私は大喧嘩をしました。その時から二度と私に口を利かなくなりました。（目に涙を浮かべ）兄、弟のような、子どもの時からの友だちで、今に至ってもどちらも相手にしなくなりました。私たちは誓い合った三人の兄弟です。一番上の兄は、滄洲の馬振雄、現在生きていますか死んでいるのか分かりません。二番目の兄は、ここ数年、私と口も聞いてくれない。ああ！（声を落として）何回になるだろう。私は頭を下げに行き、言いました、「兄さん、私たちはもうすぐ墓にはいるのですよ。だのにどうしてそんなに意地を張っているのですか！」って。私は

知っています。張兄さんは夜中に布団を被って大きな声を上げてひとしきり泣いているのです。でも、決してみんなの前で私を弟と呼んでくれることはないでしょう。私は彼の性格が分かっています。幼い頃からの友だちですから！（袖で涙を拭い、座った）^(#13)

黄子清は張老師について時にはいくらか不満は述べるにしても、彼を名指して罵ることはない。一貫してこの態度を崩すことはない。そればかりか張老師の性格を知り、あらゆる場面で自分の義理の兄だとして彼のメンツを立てる。もちろん黄子清は自分の態度、行為は決して間違っていないと思っているが、張老師との仲直りのため、ひいては日本軍との戦いの勝利のためには自分の方から頭を下げようと決心している。この台詞からも分かる通り、黄子清の性格に悪いところは何一つない。

このように黄子清が完璧な「善人」とであるとすれば、むしろ黄子清を悪くいう人が、逆に悪人であるということになるのではないか。

では、黄子清の対極に位置する張老師はどのように描かれているだろうか。黄子清が完璧な善人だとすれば、その黄子清の対極の張老師は「悪人」ということになるのではないか。

だが、張老師は「悪人」として描かれていない。武術の達人で、喧嘩がめっぽう強く、少し乱暴なのだが、義理人情に厚い、憎めないキャラクターとして描き出されている。

何故こう描いているのか。それは、張老師は「単独主義」を取っているので「単独主義」の「危険な落とし穴」に落ち込んでしまい「悪人」ではないのに「悪人」のような言動、行為をすることになってしまっている、というふうに解釈すべきであろうと考える。張老師は「悪人」ではないが、「単独主義」の「危険な落とし穴」に落ちているので、そのように見えるだけなのである。

この描き方に作者の意図が窺える。つまり、作

者がこの劇で行おうとしているのは、張老師という人物そのものを非難することではなく、彼の頭の中にある「単独主義」の危険性を暴き出し、それだけを取り出し、それを徹底的に批判しようとしている、ということなのである。

五

この劇には、張老師のような「単独主義」者がしばしば陥る「危険な落とし穴」が描き出されている。

その一つに、「単独主義」の人物は「自分の対立相手を悪く言う」人を持つ、ということがある。

「単独主義」は「対立」を生み出す。この立場を取る人物はしばしば相手と対立し、その相手を悪く思う。だから、誰かが対立相手を悪く言えば、そのことを喜んでしまう。

次の台詞は馮鉄柱のものである。

馮鉄柱 フン、僕はさらに張老師を持ち出したんだよ！

張老師 彼らはどうだった？

馮鉄柱 胡二妞は唇を丸く突き出し、まるで小さい盆みたいに突き出して、言った、張老師だって？張老師はどんな力があるって言うのよ。年ばかり取って威張って、馬鹿なことをしてる。

張老師 それは二妞が言ったのか。

馮鉄柱 大勇も言ったよ。そのうえ罵った！でもはっきり聞こえなかった。

張老師 もう良い。十分だ！ああ、年を取って、人を簡単に殴れないが、ただ乳離れをしたばかりの子どもさえにも馬鹿にされることになったとはな。それから？

馮鉄柱 そのあと黄子清の爺さんが来て、私をひとしきり罵った。あの人はいつも回教でない人にえこひいきをする。あのくそつたれ爺さん。

張老師 ますます馬鹿になりおって。ほとんど

半分気が狂っているようだ。もうすぐだな。あいつはもうすぐ回教に反抗するぞ。^(註14)

まず、馮鉄柱が黄子清の悪口を言うのだが、この劇では黄子清は完璧な「善人」となっており、むしろ馮鉄柱の方に問題があると取るべきである。

この二人の台詞のやりとりに「(馮鉄柱)張老師が嫌っている相手を明らかに悪く言う→(張老師)それを聞いて喜ぶ→(馮鉄柱)もっと悪く言う→(張老師)もっと喜ぶ」というふうにしないでエスカレートして行く様子が窺える。

この場合は、馮鉄柱はまだ子どもであり、「悪意」があつて故意に張老師と黄子清を対立させようとしているのではなく、むしろ、張老師の傾向を知っていて、張老師に気に入ってもらえるように話をしていると考えるべきだろう。

ところが、張老師は、もと親しい間柄であった黄子清のことを悪く言っている人物が、まだ子どもであるにもかかわらず、子どもの言葉に真から惑わされ、何の罪もない黄子清を「ますます馬鹿になりおって。ほとんど半分気が狂っているようだ。もうすぐだな。あいつはもうすぐ回教に反抗するぞ」とまで罵倒する。「単独主義」者が容易に陥るところである。

六

他にも、「単独主義」者が落ち込む「危険な落とし穴」がある。

今度は逆に「単独主義」者は「協調主義」者に好意的な人、或いは「協調主義」者と交流する人を問答無用に、徹底的に、かつ残酷に弾圧することがある。この種の張老師の行為が描かれている。しかも、皮肉にも、張老師が虐める相手は自分がこの世でもっとも愛する娘の張孝英である。

張老師の娘の張孝英は黄子清の経営する学校を卒業していることもあり、黄子清を尊敬して

おり、また黄子清の娘たちとも仲良くしている。だから、張老師と黄子清とが「対立」した後も、張孝英は張老師には内緒で依然とし黄子清の家に入出入りしている。ところがこのことが父親の張老師に知れてしまう。ちょうど張孝英が黄子清の家から出てくるところを、たまたま用事で黄子清の家の傍まで来ていた父親の張老師に見つかってしまったのである。このため、張孝英は張家に戻ると、家で張老師に激しく非難される。これが劇の第2幕の冒頭になる。

張孝英は早く母親を亡くし、父親の張老師の手一つで育てられた。このような事情もあり、自分も父親を愛し、父親も自分を愛していることは十分知っている。だが一方、黄子清も立派な人物であることを知っている。寧ろ父親が黄子清を批判することが問題である、と考えている。しかし、父親は自分を取るか、それとも家を出て黄子清を取るかの選択を迫る。張孝英は、やはり父親を捨てきれず、心ならずも以下のような誓いを立てることになる。

張孝英 二度と黄子清の家には行きません。(非常に速く、自発的に) 二度と漢族の人と交際したりしません！(ひとつ溜息をつき)お父さん、もう怒らないでしょう。私を許してくれるでしょう。

張老師 (少し佇み、微かにちょっと笑って)うんー、それでワシも安心だ。(ゆっくり座って) 孝英、早く知っておくべきだった。他のことだったら相談することもできるが、この件に関しては相談の余地はない。絶・対・に・黄・家・に・行・く・な。ちゃんと聞いているか！^(註15)

ここは、この劇で、張老師がもっとも愚かで、残酷な人物として観客の目に映る場面である。

父親が娘に無理な要求をし、それをためらう娘を無理矢理従わせようとする。しかも、ここには、父の命令に従うのは間違いだと知りつつ、心ならずも黄子清と縁を切る約束してしまう娘

の悲しい姿がある。

なぜこのようなことが起こっているのか。それは、決して張老師が「悪人」だからでもなく、本当に娘を憎んでいるわけでもない。ただ張老師が「単独主義」を取っているからなのである。だから黄子清を憎み、敵視してしまい、このことが父親と娘との関係にも不幸な状態をもたらしていると理解すべきである。

ここでの張老師は次のように解釈できる。

確かに、この場面での張老師は愚かで、残酷なことを行う人物になっている。だが、張老師は「悪人」ではない。張老師がこうなっているのは、張老師をこのようになっているものが背後にあるからなのである。この背後にあるものが実は「単独主義」であり、その「単独主義」から発生している悪しきものであり、この「悪しきもの」が、張老師をこんなふうにさせているのである。

七

さらに、「単独主義」に発生するだろう、もっと大きな、そして恐ろしい「落とし穴」がある。

「対立」を利用して「悪いことを企む」人物が張老師の傍に入り込むのである。張老師もこのような人物を喜んで迎えて入れる。「対立」そのものも厄介だが、「対立」から生じるこのような事態はもっと厄介で、恐ろしい。

この人物は張老師の歓心を買ひ、張老師の信任を得、そしてさらに「対立」を利用して「ある意図」を実現しようと企てる。この人物には却って「対立」は歓迎すべき状態であり、「対立」に向かうように張老師をそそのかし、自らも「単独主義」グループに属する回教徒を「対立」へと扇動する。

この人物は金四把と言ひ、この人物だけが真正銘の「悪人」である。彼の存在はこの劇では、第一幕の早い時期に張孝英の台詞の中でほのめかされる。

張孝英 もう他に別に言わなくちゃいけないことはないけど。ただ、最近お父さんが金四把の話が一番信用してるってことが目立っているわ。——金四把の話は永遠に仲間割れさせるものなの。伯父さん（黄子清……筆者注）、用心してね！

李漢烈（彼女と話すチャンス到来とばかり）金四把って誰？何者なの？

張孝英 それは——（言いたがらず）伯父さん、私、家に入るわ！（^{#16}）

そして、この後、金子把は張老師の影のようにいつも張老師とともに登場してくる。最初、張老師には非常に忠実で、他の人物にも謙虚な態度で接し、しかも言葉巧みというより、寧ろ思い切って自分の意見さえも言えない人物として登場する。

張老師（命令ふうにお前、県長官に言え！
金四把、さあ！

金四把 はい！はい！張老師！あのう、あのう！県長官！県長官に報告いたします！（立ち上がり、お辞儀をする）

趙県長 座って話さない！

張老師 座れ！早く話すんだ！（威張って手を膝に置き、目はまっすぐ前を見て、まるで何かの英雄のブロンズ像のようだった）

金四把 はい、はい、はい！（座ったが、依然として石の椅子の端に跨っている）こんなふうなのです。今日は成年男子の抽選の日ですから、私たち——張老師と私——は長官が必ず参られると承知しておりましたので、本当は城外に歓迎に行くべきでした。でも、長官がいつ参られるのか存じませんでしたので、失礼しました。大変失礼をしました！（^{#17}）

最初は「善人」で、「小人物」のような印象を与えながら、しだいにその「悪人」の本性を表

して行くという描き方は、老舎の他の作品にも見られ、まさしく老舎の得意とする創作手法である。（^{#18}）

やがてしだいに金四把の「悪人」としての正体が明らかになる。例えば、金四把の、張老師と黄子清との仲を引き裂く台詞がある。

金四把は、張老師が今まさに黄子清のところへ仲直りをしに行こうという時に出て来て、張老師に以下のように言う。

金四把 ええ！ちょうど良いところに来ました。たった今私が東大通を通っていると、一群の人が黄さんを囲んでいるのが見えました。また、そこで——張老師、あなたのことをとやかく言っていたのです！私は告げ口はしません、私がそっくりのことを言う必要はないでしょう——どのみち彼が話したのは何か推測できるでしょうから。（^{#19}）

もちろん、このような事実はありえない。すでに述べたように、この劇では、黄子清は完璧な「善良な人物」だから、黄子清が張老師の悪口を言うはずはなく、このように言う金四把の方が問題なのである。

また、金四把は張老師と趙県長との仲も裂こうとする。彼は張老師に、趙県長が張老師に頻りに近づいてくることを取り上げ、以下のように告げる。

張老師 彼らのことなど知ったことではないぞ！

金四把 そうじゃないでしょう！（声を低めて）長官がどうして何度も、何度もあなたに会いに来るのですか？それはあなたのその百十なん丁かの鉄砲を利用するためではないですか。彼ら漢族の武器は足りなくて、戦いに行ったら必ず敗れて帰ってくることになる。ひとたび敗れば、県の長官職は返上しなければなりません。

こんな時代ですから、県の長官になるのは容易じゃない。そう易々と職を失いたくないでしょう。だから、私たちが人を出し武器を出すことに少しでも値打ちがあるのか疑問を感じるのです。^(註20)

趙県長もこの作品では完璧な「善人」であるから、絶対にこのような事実があるはずはなく、金四把の作り事であることが観客にすぐわかる。ストーリーの流れから考えれば、趙県長が張老師の処に頻繁に通うのは、他でもない「回漢団結、共同抗日」を早急に実現しようと考えているからなのである。

金四把の言動はしだいに過激になって行く。金子把は漢族の人々に取り入ろうと、自分が回教徒でないといまで言い始める。

金四把 李さん、どうか誤解しないでください。私の実家の父は李の前代の旦那さんととても仲が良かったのです。いわば、私たちは何代も前からの付き合いということになりますか。この話は、あなたが少しお若いので、おそらく余り、その、はっきりお分かりにならないでしょうが。どうお思いになりますか。私はその実イスラム教徒ではなくて——

胡大勇・李漢烈 (二人同時に) 本当にイスラム教徒ではないのですか？

金四把 この話は他の人は知りません。話せば長くなります。

李漢烈 そいつは本当に不思議だ。

金四把 ですから、張老師のようなあんな自分勝手な人を、私は軽蔑しています。李さん、おそらくご存じないと思いますが、彼は影で本当にあなたをぼろくそに言っています！

李漢烈 (堪えきれず) もう良いよ。もう良いよ。^(註21)

このような言葉も、金四把が張老師にどのよ

うに言っているのか分かっていれば、彼が如何に出鱈目な人物であるかがよく分かるのだが、漢族と回族の「対立」の構図の中では、一方の側には「真実」が見えず、むしろこのような言葉が歓迎されることがあると考えられる。幸いに李漢烈という人物は、少しも「対立」の立場を取ってはず、それどころか回族にむしろ好意さえ持っているので、金四把の悪意を見抜き、彼を心の底から嫌悪するのである。

そしてついに金四把と日本軍との関係も明らかになる。

金四把 お前の将来に関わる一通の手紙だ。

馬宗雄 私に関係あるですって？

金四把 そうだ。お前だ。宗雄、お前は子どもだが少しは骨があると見ている。だから、お前が逃げたくないと私に話すのを聞いて、私はとても同情し、私の心はひどく悲しくなった。まして、先代のお祖父さんが生きていた頃、僕の父はあなたのお祖父さんととても仲が良かった。だから私たちはまた何代もの前からの付き合いなのだ。私は老人たちの友情のために、あなたの面倒を見ないわけにはいかないのだ。日本の軍隊に友人が一人いる。

馬宗雄 ええ——

金四把 この手紙を彼に渡せば、お前はこの県の公安局長だ。

馬宗雄 公安局長ですって？

金四把 そうだ、私はこの中で彼に頼んだ。どうか清水村に入ってから、あなたを公安局長に委嘱して下さい。^(註22)

金四把が馬宗雄に託し、日本軍に渡そうとした手紙は、趙県長の手に渡る。

趙県長 私がみんなに読んで聞かせよう。「漢回」の協力がすでに出来上がっており、実力は凄いものになっています。保安隊だけでも、およそ千余名です。今、張老師が

すでに百人余りを引き連れ前方に突撃します。まずこれを撃滅すべきです。その他の人はその後引き続きやって来ます。別の県の保安隊が増援でやって来ます。夕方には到着するでしょう。行路を断つようにすべきです。どうか早く準備をしてください。金四把^(註23)

彼の正体がすべて明らかになった瞬間である。ここに来て、金四把が何故「対立」を煽り、「団結」を阻止し、中国側が不利になるように画策していたのかが明らかになった。そして、この時に、張老師は、自分が自分の気持ちとは別の「中国側を不利にする」企みに手を貸していたことに気がつくことになる。

ここに来て、張老師は以下のように言う。

張老師（長い時間）ただ彼ら若い連中が、私のようなザマを学ばなければ、それで良いんだ。^(註24)

張老師は自らの手で金四把を殺し、自分も日本軍との戦闘の際に負った深手により死んで行く。ここで劇が幕になる。

結局、張老師は自分の誤りを認めた。ここに来て「単独主義」の愚かさを自覚したのである。

八

この作品は日中戦争下における「回漢団結、共同抗日」がテーマである。だから最初からこの劇では「協調主義」が是であり「単独主義」が非であると言って良い。そして、「協調主義」の代表が黄子清で、「単独主義」が張老師になっている。

この劇での作者の「単独主義」の否定の仕方は極めて巧妙である。「単独主義」にも人気があることを一旦認めた上で、その「単独主義」の問題点を描き出し、「単独主義」を否定して行くのである。

「単独主義」はしばしば「対立」を発生させる。そして、この「対立」が思わぬものを次々に生み出す。敵対、憎悪、弾圧といったものである。自分を慕っている者さえも残酷に痛めつけることもある。

「対立」関係が存在している時には「対立」を利用して悪魔が入り込んでくることがある。「対立」の中に居れば、その一方の「真実」が見えない。だから、人々は悪魔が入り込んでいることに気がつかない。「対立」の一方に入り込んだ悪魔は「対立」を利用し、さらに拡大し、「団結」を阻止し、日本軍が有利になるように企てるのである。

張老師は「単独主義」を取っているが、決して「日本軍を有利にしよう」といった気持ちは全くなかったにもかかわらず、悪魔に利用され、日本軍を有利にすることに手を貸すことになってしまった。これ以上の「単独主義」の否定はない。

この作品は、このような方向で解釈すべきであろうと考える。

この劇の効果を高めているのが、人物の描き方であると思う。

特にこのうち張老師の描き方に注目したい。彼はもともと「単独主義」者だからこの劇では否定される側、つまり「悪人」の位置になることになる。しかし、そうでありながら決して「悪人」ではない。いや「悪人」どころかこの劇では「立派な人物」の姿を最後まで保ち続けているのである。

後半になると、観客には金四把が「悪人」であることが完全に分かってくる。明らかに張老師は金四把に騙されている。だが、誰が忠告しても、張老師はなおかつ金四把を信じ、擁護する態度を取り続ける。

こうなると必然的に、真実を見抜けない「間抜けな」人物であるという印象が出てくるはずなのだが、これが押さえられ、この劇では、最後まで「立派な人物」であり続けるのである。

なぜのようなことになるのか。以下に、この

理由に関わると思われる描写の部分を書きでまとめておく。

- ① 武術に優れ、正義を愛し、悪を懲らしめる思想の持ち主である。
- ② 非常に優しく、賢い娘がいて、父親の彼を愛し、最後まで見捨てることがない。
- ③ 「協調主義」は取らないが、それを推進している趙県長を心から信頼している。
- ④ 友人の黄子清も一貫して張老師を立て、その姿勢を崩すことはない。
- ⑤ 登場人物で「悪人」以外の誰も張老師を罵ることはない。
- ⑥ 日本軍と戦う際には先頭に立つことを望んでいるし、それを実行し、最後に日本軍と勇敢に戦い死んで行く。
- ⑦ 義理人情をことのほか重んじる。
- ⑧ 人に簡単に騙される。

このように、張老師に最後まで「立派な人物」というイメージを与え続けたことにも、この劇が多くのお客に受け入れられた理由があると思われるのである。

おわりに

この劇は、今回の分析で明らかのように、回教救国協会に依頼されたものであるが、決して単なる「回漢団結、共同抗日」を宣伝のためだけの作品ではなくもっと高いレベルの作品のようにみえる。ここに描かれている「対立」でも、回族と漢族の民族間の「対立」を越えた、「対立」そのものに永遠に潜む問題までえぐり出して我々の前に示しているように思われる。このようなものも観客の心を捉えたのではないか。

また、この作品で回族の登場人物で「悪人」は一人もいないのである。「回漢団結」に抵抗している人間をも「悪人」にしない。「悪人」の金四把も、実は、張老師を「悪人」にしないために生み出されたと考えることもできる。

まだ筆者の老舎の話劇研究は、彼の小説作品と比べるとところまで至っていないが、小説では、物

語の中である人物が「悪人」的行為をしながら、その人物を「悪人」として描かないことがしばしばある。その場合、その人物は「正しい」と思って実は「悪いこと」をしている場合が多い。この劇の張老師も、もしかしたら小説の、その系統の人物という方向から理解できるかもしれない。(完)

注

この小論のテキストは『老舎全集9』（人民文学出版社・1999）を使った。したがって、この注に付されているテキストのページはこの『全集』のものである。この作品は『老舎劇作全集3』（中国戯劇出版社・1982）にも『老舎文集』（人民文学出版社・1984）にもある。

- (1) 老舎は『残霧』（1939）発表後、続けて話劇作品の『国家至上』（1939）『張自忠』（1940）『面子問題』（1941）『大地龍蛇』（1941）『掃去来兮』（1942）『誰先到了重慶』（1942）『王老虎』（1943）『桃李春風』（1943）を次々と発表している。
- (2) 拙論「老舎『残霧』試論」八戸工業大学紀要第25巻（平成18年2月）参照
- (3) 『老舎全集9』の『国家至上』には「序」と「後記」が付いている。ただ「序」には「卅十年秋老舎序於陪都」と年代が記されており、「後記」には「二十九年，五，十八」という年代が記されている。このように老舎が「序」と「後記」書いた時期が違っているのである。もしかしたら別々の本に入れられたものを『全集』を編纂するときに、この「序」と「後記」を、この作品に加えた可能性がある。まだ調査が必要である。
- (4) 『国家至上』p. 200
- (5) この当時重慶では何人かで一本の劇を作ることが流行っていたらしい。
- (6) 『国家至上』p. 109
- (7) 『国家至上』p. 111
- (8) 同上
- (9) 同上
- (10) 『国家至上』p. 116
- (11) 『国家至上』p. 133
- (12) このような人物の描き方は老舎の一つの描き方の特徴である。小説における人物描写に関して以前、この『紀要』でも述べたことがある。
- (13) 『国家至上』pp. 118-119
- (14) 『国家至上』pp. 133-134
- (15) 『国家至上』pp. 137-138
- (16) 『国家至上』p. 122
- (17) 『国家至上』p. 128

老舎『国家至上』試論（渡辺）

- (18) 劇のストーリーの展開にしたがって、しだいにその人物の正体を明らかにして行く手法は、前作の『残霧』にも見られる。拙論「老舎『残霧』試論」（八戸工業大学紀要第 25 巻）でそのことを述べた。
- (19) 『国家至上』 p. 148
- (20) 『国家至上』 p. 153
- (21) 『国家至上』 p. 169
- (22) 『国家至上』 p. 187
- (23) 『国家至上』 p. 197
- (24) 『国家至上』 p. 198